

宝の海から

白浜で出会ったオオタマウミヒドラ

64

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

毎冬タイド プールに出現

毎年、真冬になると田辺湾では番所崎の先端の岩礁海岸のタイドプールにオオタマウミヒドラが目覚める。

ア」という新属が設けられた。その成熟クラゲは短命で、触手もなく、有性生殖専用の特化した姿をしている。

オオタマウミヒドラのポリプは、田辺湾周辺海域では、湾の入り口の岩礁付近にしかいない。波の強い、潮通しの間に、北浜の船着き場の付け根には1個ずつの赤い眼点がある。眼点は像は結ばないが、光を感じることができると、横から光をあてると、その方向に向かって泳ぐ。

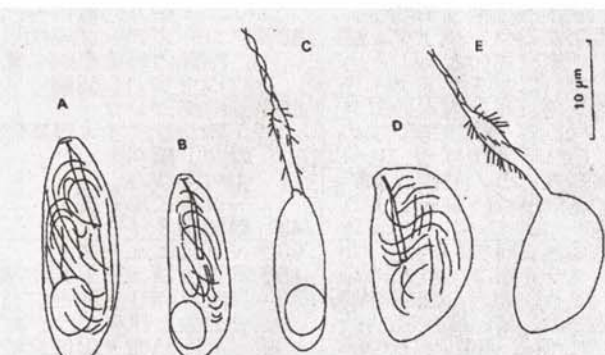


Fig. 2. Two types of microbasic euryteles found in the hydrocorynid polyp from Oshoro. Both discharged and undischarged states are shown.

オオタマウミヒドラのポリプがもつ謎の刺胞とその種類と同じだが別のタイプの刺胞 (kubota,1988より)

生息深度を浅くすることが知られているので、光量と関連した行動をとる本種でも海中で、似たような日周期的な垂直移動をしている可能性がある。

このクラゲは暑い時期にまったく姿を見せないが、水温が低下すると、根の部分から長さ数センチの大形のポリプ体をいっしょに伸ばさせる群体(ぐんたい)を作るので、肉眼でも分かるようになる。潮が引いたタイドプールの水面ぎりぎりの岩にコケのようにびったり付着している。波立つ水面に体を柔軟にゆらめかせながら、刺激に応じて伸縮が自在の体で餌を食べて暮らしている。

謎の刺胞持つ オオタマウミヒドラ

生活史は筆者が最終的に解明したものだ。他のヒドロ虫綱がめったに持たない謎の刺胞を触手に装備することも発見した。毒液を含んだカプセルの中にまったく使い方の分からない固い球体が1個ある。防御と餌の捕獲に使うと思われるが、実際に何に使われているのかは今後の研究課題だ。

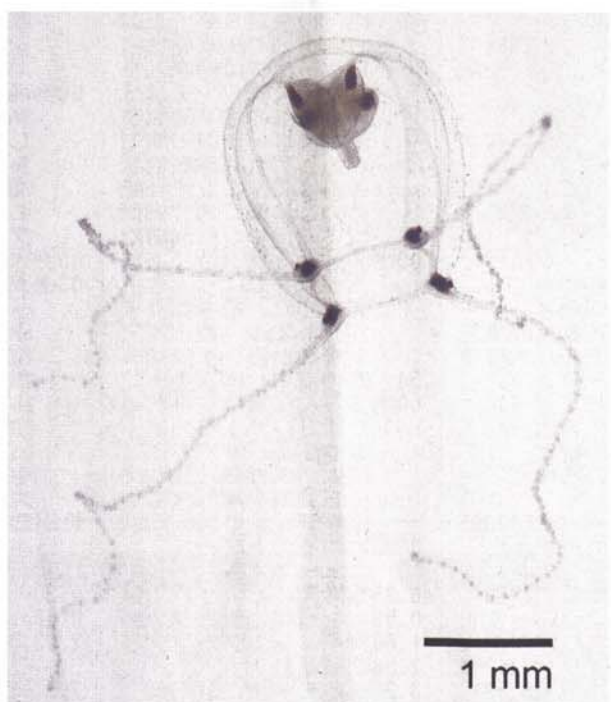
世界での分布から分類学的諸問題までの生物学的事項について、1988年に出版された瀬戸臨海実験所欧文報告第33巻の1-3合併号にまとめられている。本種は、いまだ一つの科をなす特異的な分類群のまま。07年に、わが国の三浦半島から

よい場所を好む。群体は数えるほどしか発見できていない。そのため、クラゲもこれまで相当な回数、いろいろな時期に田辺湾のあちこちでプラシントンネットびきで採集してきたにもかかわらず、1個体も捕れたことがなかった。

受精卵は卵割後、プラヌラ幼生となって、細長い体の全体に生えた繊毛を使ってしばらく遊泳した後、岩などに付着し、小さなポリプになり、これが大きく成長するという一生を送っている。



番所崎先端のタイドプールに冬季に姿を見せたオオタマウミヒドラのポリプ



田辺湾のプランクトンサンプル中に発見されたオオタマウミヒドラのクラゲ(河村真理子院生撮影)